

「～と違って」による応答は何をしているのか

— 相互行為における「～と違って」の機能 —

伊藤亜紀（名古屋大学大学院）

キーワード：質問-応答連鎖、会話分析、思考の言語化、説明

1. はじめに

本発表では、日常会話に見られる「～と違って」で終わる発話が質問の応答として使用される場合、相互行為上どのような機能を持ち、どのような行為を成し遂げるために使われているのかを会話分析(CA)の手法を用い、質的に分析、考察する。

2. 先行研究と本発表の焦点

挨拶をすれば挨拶を返し、呼びかければ応答を返す。このような隣接対と呼ばれる発話の交換は連鎖組織の基本であり (Schegloff 2007)、典型的なものに質問-応答の連鎖がある。本発表では、質問の次に別の話者によって産出される「思っ」で終わる発話を観察する。様々な場面に登場する「～と違って」で終わる発話の中から、本発表の対象を厳密に抽出するために、1) 質問の発話順番に使用され、当該発話のみで質問への応答として認識される 2) 発話末の音調が下がっている 3) 主節にあたる発話が観察できないという 3つを発話末の要件とする。

「～と違って」を対象にした研究は、管見の限り Shimotani & Endo(2014)のみで、ストーリーテリングに見られる「～と違って」を広く考察し、次に言われることと連鎖的、かつ文法的なつながりがあるものを”Sequentially-linking omotte”、前のターンで言われたことと同様のつながりがあるものを”Retroactively-linking omotte”に分け、それぞれ 2つのサブタイプがあることを例とともに示した。陳(2018)は質問-応答の連鎖においてテ形で終わる発話が質問として発話されたもののみを対象としている。本発表では上記の論文で対象とされていない質問に対する応答として使用されるものを観察する。

言い切らない形式で終わる発話に関しては多くの先行研究があるが、白川 (2009) は言い切らない形式で終わる発話を「言いさし文」と呼び、テ形終わりに関しては、「事情の説明」「感嘆」「陳謝」「感謝」「非難」の機能を持ち、文脈への依存性が強く、文脈上に関係する事態が存在したり、テ形で終わる発話が話者の評価的態度を表したりする場合には従属節のみで終わる文になると述べている。

動詞「思う」の活用形の 1つだと考えられる「思っ」が相互行為上の機能を持ち、日常会話で使用されることがわかれば、今後の会話教育における学習項目の再考にもつながると考え、研究対象とした。

3. 研究方法とデータの概要

本発表では、Harvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jefferson らが開発した会話分析 (以下、CA) の手法を用い、ビデオデータとその詳細な書き起こしを観察するが、CA で一般的に使用されている書き起こしシステム (申田・平本・林 2017) を使用した。対象発話は太字で示し、書き起こしに使用した記号一覧は付記に最後に載せる。使用したデータは下記の通りである。

- (1) CallHome Japanese Corpus(約 2 時間) 「電話会話」
- (2) 筆者自身が撮影したビデオデータ(約 2 時間 30 分) 「大学生 3 人のおしゃべり場面」「女性 5 名

の昼食場面」「大学生、大学院生の初対面場面」

(3) 研究協力者から提供のあったビデオデータ(約 40 分)「大学生のおしゃべり場面」

(4) テレビのインタビュー番組(約 50 分)

この中で、本発表で対象と考える「～思って」で終わる発話は 11 例あり、以下の通り 3 分類できる。

A) 「～と思って」で終わる発話で応答するもの(6 例)

B) 一旦終わった発話に「～と思って」を付加するもの(1 例)

C) イェス・ノー等、何らかの応答をしてから、「～と思って」で終わる発話が続くもの(4 例)

本発表では、A に焦点を置く。

4. 観察

「思って」で終わる発話の観察から、質問に対して当該発話で応答する場合、以下のような共通点が観察された。(混乱を避けるため、「～と思って」で終わる発話に先立つ質問をした者を質問者、「～と思って」で終わる応答をした者を応答者、その後反応を返した者を受け手と表記する)

(a) 応答者は非流暢的に話し、応答することに困難を感じている。

(b) 応答者は明確な情報を質問者に与えていない。

(c) (b)であるにも関わらず、受け手は応答として受け入れる反応をしている。

これらの共通点をもとに考察した結果、当該発話には、以下 2 点の相互行為的機能があると考えられる。

1. 現在の思考を言語化し、質問者の応答要求に対し明確な回答がないことの説明を行う

2. 自らの行為の正当化を行うために、過去のある時点の思考を引用することで遡及的に発話や行為の説明を行う

4.1 質問に対する明確な答えを持っていないことの説明

まず、上記 1 について断片を元に主張に対する例証を行う。断片 1 は男女の電話会話である。女性の友達がアメリカに留学するため、ちょうどこの電話の少し前に飛行機に乗ったところだと説明した。現在日本にいる女性は「今度アメリカに行く際には彼女のところにも立ち寄ろうかと思っている」と男性に話した直後の会話である。

<断片 1 「友達訪問」 CallHome1201>

1 男性: ああ,そう,よかった[ね:]

2 女性: [うん. (0.3) 何が:]

3 (0.2)

4 男性: え! よかったじゃん(0.3)

5 女性: 何が,よかったの?

6 (0.3)

7 男性: **h いや h¥なんか:: ¥ (0.2) .hh (0.7)よかったな::と思っ[(て).**

8 女性: [ahahahaha]hhh

1 行目の発話に対し、女性は 2 行目で一旦「うん」と答えたものの、1 行目で明示されていない主語に当たる部分を質問する。4 行目で男性はすぐ応答を返さず、1 行目の「ね」形式を強く自身の意見を主張する「じゃん」という発話末に変え応答する。しかしそれが 2 行目の女性の質問への応答になっていないため、女性は再度同様の質問をフルセンテンスで言い直し、5 行目で問いかけ直す。5 行目は疑問詞疑問文であり、続く応答としては質問で使われた疑問詞に合わせて情報を返すことが求められるが、0.3 秒の間の後、7 行目で男性は「いや」という感動詞 (Hayashi&Kushida 2013)を応答の初めに引き、

質問に明確に答えるのが難しいという抵抗を示す。さらに、「なんか」といったフィラー、ポーズや吸気等を使い、言いづらさを発話全体に示しながら7行目の応答を返すが、結果「何がよかったのか」という女性の問いには明確に答えていない。つまり、現在の「よかったな」という思考内容を「思って」の形式で示すことで、それ以上答えることはできず、求められる応答は返せないことの説明を行なっていると言える。

質問に対して、明確な答えを持たない、明確に答えられないということは日常よくある。Fox & Thompson(2010)は英語での会話において、疑問詞疑問文に対する応答で、句での応答は特定の質問に対する単純な応答であり、節での応答は質問や連鎖に問題がある際に用いられると述べている。日本語での先行研究は見当たらないが、英語同様、明確な答えを持っていない時には端的に返答することは難しく、現在の個人的な思考を非選好的に示すことで、明確に答えられない現状にあるということを説明していると考えられるかもしれない。

4. 2 応答者自身が行った行為の説明

ここでは、上記2について例証を行う。断片2は姉妹の電話会話である。妹は姉にもらったラベル作成用ソフトウェアをインストールして使用しており、それに用いる印刷用紙の種類について確認した後に、プリンターのインクを買ってきてくれるよう姉に依頼をする。

<断片2「プリンターのインク」(高木 2009, 50)>

1 妹: を<あそこで>買ってくる?

2 (0.7)

3 妹: 今日<ヤシマ>に行ったんだけど:

4 (0.5)

5 姉: あ! (.) ないわけ:::?

6 (0.5)

7 妹: 金額がちょっと高いかな[:と (h) 思って(h) hehhhhhh.

8 姉: [あ! ああ: (hh) そっか (h) そっか(h).=

1行目で、プリンターのインクを買ってきてくれるよう妹は姉に依頼する。その後0.7秒の長めの間がある。一般的に依頼の次には「受諾」または「拒否」の反応が来るが、行為の実現を進める反応(この場合は依頼に対して受諾)の場合は「直ちに」「簡潔に」「直接的に」産出されるが、反対に行為の実現を進めない反応(拒否)の場合は「遅れて」「複雑に」「間接的に」産出される(串田・平本・林, 2017)。2行目の間というのは、この後に後者の反応が来そうな兆しを示していると言える。1行目の依頼の後、姉から反応がなく、妹自らが発話のターンをとり、3行目を始める。3行目のケド節を聞いた姉は何か気づいたことを表す「あ!」という感動詞の後、「買いに行ったけれど、ヤシマにはないから頼んでいるのか」という推測を質問形式で述べる。その後も0.5秒という長め間があり、姉の質問に妹はすぐ反応せず、7行目で当該発話を含み反応をする。6行目までに姉は依頼を受け入れる発話をしていない。この場合、妹にとって、依頼を受け入れてもらうためにできることは、依頼をした正当性を高めることであると言える。8行目で自ら購入する努力はしたものの、「値段が高い」と過去の自らの思考を「～と違って」という形式で表すことで、妹は依頼の正当化を行なっていると言える。

5. 結論

本発表では「～と違って」という1つの発話末の形式を取り上げ、動詞「思う」の活用形の1つだと

思われる「～とって」という形式の相互行為上の機能を考察した。「～とって」の日常会話における頻度は高く、ストーリーテリングの中、質問-応答以外の連鎖においても出現する。今後はより多くの視点から「～とって」を観察し、汎用的な説明が可能なのかについて考えていきたい。

注

1) CallHome Japanese Corpus はアメリカ在住日本人と日本にいる知人による電話会話データであり、The TalkBank Project (MacWhinney,2007)にて公開されている。

参考文献

串田秀也・平本毅・林誠 (2017)『会話分析入門』勁草書房。

白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版。

高木智世(2009)「社会的実践としての日常会話Ⅱ —「親しさ」の実践—」論叢現代語・現代文化, 3.

陳力(2018)『テレビ番組のインタビュー・トークにおける発話デザインの相互行為的分析』九州大学大学院地球社会統合科学府博士論文(未公開)。

Fox, B.A. and Thompson, S.A. (2010). "Responses to Wh-Questions in English Conversation", *Research on Language and social interaction*, 43(2), pp.133-156.

Hayashi, M. & Kushida, S. (2013). "Responding with resistance to Wh-questions in Japanese talk-in-interaction", *Research on Language and Social Interaction*, 46(3), pp.231-255.

MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J.C. Beal., K. P. Corrigan. and H. L. Moisl. (Eds.) *Creating and digitizing language corpora: Synchronic databases*, Vol. 1. pp.163-180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.

Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I*. Cambridge: Cambridge University Press.

Shimotani, M. and Endo, T. (2014). "Sequential patterns of storytelling using omotte in Japanese conversation", *Journal of Japanese Linguistics*, 30, pp.33-53.

付記 (トランスクリプト記号一覧)

[この記号をつけた複数行の発話が重なり始めた位置

] この記号をつけた複数行の発話の重なりが解消された位置

= 前後の発話が切れ目なく続いている。または、行末にこの記号がある

行から行頭にこの記号がある行へ間髪を入れずに続いている。

(数字) 沈黙の秒数 (.) ごく短い沈黙。およそ 0.1 秒程度 文字- 直前の語や発話が中断されている

文字:: 直前の音が延びている(「:」の数が多いほど長く延びている) 文字. 尻下がりの抑揚。

文字? 尻上がりの抑揚。 文字! やや尻上がりの抑揚。

文字, まだ発話が続くように聞こえる抑揚 文字! 声が弾んでいる。

↑文字 直後の音が高くなっている。 文字↓ 直後の音が低くなっている。

文字 強く発話されている。 °文字° 弱く発話されている。

hh 息を吐く音。 .hh 息を吸う音。

文(h)字(h) 笑いながら発話している。 ¥文字¥ 笑っているような声の調子で発話している。

<文字> ゆっくりと発話されている。 >文字< 速く発話されている。

(文字) はっきりと聞き取れない部分